

## 居酒屋サブの料理帖・京都おばんざい編# 3

### (雨の日の可愛い訪問者)

幼い女の子が雨の中、烏丸通を歩いていた。

夜の10時も過ぎており、何人かの大人が迷子かなと心配になり声をかけるが、女の子は相手を睨みつけるだけで返事をしない。

3～4歳ぐらいの年恰好なので、まだ意思疎通が出来るほど喋れないのかもしれない。

きっと親から知らない人に声をかけられてもついて行かないようにときつく言われているのだろう。

「私のママはどこへ行くのだろう？」と呟きながらとぼとぼ歩き続けていたのである。

雨は容赦なく女の子に降り注ぎ、疲労と寒さと空腹で今にも倒れそうであった。



京都の烏丸通と三条通の交差点辺りの細い路地を入ったところに小さな居酒屋サブがある。店主の響三郎（通称サブ）が一人で切り盛りしている店である。

「なかなかいい店だね、静かで家庭的で料理も酒も美味しかったよ」

「おおきに、またおこしやす」

三郎は接客対応の京言葉にも少しずつ慣れてきたようである。

岩手から来た客を送り出すと外は激しい雨が降っていた。ほかに客はいないし、今日は店じまいにしようと思暖簾を取り込んで後片付けをしている時に、小さい女の子が倒れ込むように店に入って来た。

「お嬢ちゃん、どうしたの？ どこから来たの？ 一人？」

女の子はじっと三郎を見つめて泣きながら佇んでいた。

女の子が寒そうなのでタオルで頭と顔を拭いてストーブのそばに座らせた。

「お嬢ちゃんは、お腹がすいているのかな？」

女の子は三郎の問いかけに、こっくりうなずいたので、残りのおでんを暖めて食べさせた。美味しそうに食べていたが、空腹が満たされ暖かくなって安心したのか、こっくりこっくりしだした。三郎は仕方が無いので、奥の部屋に布団を敷いて寝かせた。

三郎には自分の家が伏見にあるが、店までは通勤が面倒なので普段は店の奥に寝泊まりをしている。

後で問題にならないように、近所の交番に電話をして、昔からの知り合いの大島巡査にき

てもらった。

「サブさんの隠し子じゃないの?」、と軽口をたたきながら女の子の寝顔の写真を撮ったり、着物や履物、持ち物をチェックしてから、

「本部には連絡しておきますが、今日のところはもう遅いので、女の子はこのままここで寝かしておいてください」

「おいおい、ちょっと待ってよ、普通は交番であずかるのではないのか?」

「はいはい、明日また来ます」

とって、大島巡査は逃げるように帰って行った。

戸締りをしている時に、「アイをよろしくおねがいします」という女性の声が聞こえたような気がしたが、周りを見回しても誰もいなかった。

火曜日は週に一度の定休日なので朝遅くまで寝ていたが、三郎が起きると女の子はすでに起きており、店の中や表を掃除していた。

一宿一飯の恩義ではないが、よく躰けられていると三郎は感心した。

「サブおじさん、おはようございます」

「おはよう」

どうしてサブと言う名前が分かったのであろうか? 昨日の女性の声のこともあり、三郎は不思議に思いながら、朝食に子どもの好きなソーセージ・エッグにサラダとトーストを用意した。

「お嬢ちゃんの名前は?」

「はなむら あい」

しっかり握っていたポシエットには花邑藍と書いてあった。この字の名前は珍しいし、三郎にはちょっと引かかるものがあった。

響三郎が退職する3年前のことであるが、長岡京市栗生（あお）で起きた暴力団同士の抗争現場で三郎は陣頭指揮をとっていたのである。

場所は住宅地であり長岡天満宮にも近く、一般人が近づかないように徹底した交通規制を敷いていた。

その時、交通規制外の道路をたまたま歩いていた花邑信一郎に暴力団員の放った流れ弾があたったのである。

救急車で搬送されたが、手当の甲斐もなくその晩に亡くなった。

花邑家は裕福な家庭ではなく、信一郎には妻と子供以外に親族はなく、家は借家であった。乳飲み子を抱えて駆け付けた妻の花邑佳代は身寄りの無いシングルマザーとなったのである。

やむを得ない状況であったとは言うものの、京都府警にも落ち度はあったのではないかと三郎は考えていた。

身寄りのない親子を何とかするべきではないのかと上司や仲間に相談しても、理解を示してくれたのは同じ捜査一課の山崎先輩だけであった。

三郎は伝手（つて）を頼って乳飲み子を抱えて住込みで働ける処を捜しまわり、やっと見つけたのである。

知り合いの保育園で、園児の世話をしながら園児向けの食事やおやつを調理する仕事である。幸いなことに両方の資格を佳代は持っていた。

その日の午後、大島巡査が居酒屋サブに来て詳しい状況が判明した。

やはり、女の子は花邑信一郎と花邑佳代の娘の花邑藍で、4歳とのことである。

母親は昨晚ひき逃げ事故で亡くなったそうである。車にぶっつけられた母親は衝撃で歩道に倒れ込んだのであるが、娘を守るように抱えていたため歩道の縁石に頭を強く打ったのだ。

激しい雨のため目撃情報も少なく、その付近には防犯カメラも設置されていなかったため、犯人は今も逮捕できていないとのことである。

母娘は救急車で病院に運ばれて、緊急手術となった。母親の手術中、娘は廊下のベンチに座らせていたという話である。

手術の甲斐もなく花邑佳代が亡くなったあと、女の子を捜したがどこにも見つからず、病院から捜査願いが警察に出されていたそうである。

藍には父方にも母方にも親族がいなかったため孤児院に預けられることになった。

手続きのため、大島巡査が花邑藍を連れて行こうとすると、藍は三郎にしがみつ火が付いたように泣き叫ぶのであった。

藍が泣きながら話すには、「ママが私についておいで」と言うので、病院からここまで雨の中歩いて来たというのである。「サブおじさんは優しい人だから藍の面倒をきっと見てくれる」と言ったというのである。

一人残される娘が心配だった花邑佳代には昔親身になって面倒を見てくれた響三郎しか頼りになる人は思い浮かばなかったのかもしれない。

花邑佳代が霊になって居酒屋サブまで娘を案内してきたのであろう。

身寄りのない花邑佳代の葬儀は山崎先輩の協力を受けながら三郎が出すことにし、本隆寺の花邑信一郎と同じお墓に葬ることにした。

色々面倒な手続きはあったが、花邑藍は元の戸籍のまま三郎が育てることにした。

洗面用具や下着、洋服、布団など取り敢えず藍に必要そうな物は近所の気の良い女将さん（霧島洋子）が見繕ってくれた。

保育園にも行かせたいので、こちらも女将さんに紹介されて手続きを済ませた。

問題は居酒屋サブには内風呂が無いので藍を連れて銭湯に行くのであるが、男湯に入れていいのかどうかである。調べたところ厚生労働省の指針『公衆浴場における衛生等管理要領』では、おおむね10歳以上の男女を混浴させないこと、とされている。加えて、各都道府県が定める公衆浴場条例があり、京都府では上限の年齢は6歳までとされている。

近所の銭湯で、「サブおじさんの背中は大きいね」と、言いながら背中を洗ってくれる藍が小学生に上がる頃を思い浮べ、複雑な気持ちになる三郎であった。

サブおじさんと藍ちゃんの奇妙な共同生活の始まりである。

次回の投稿がいつになるか分かりませんが、 つづく